慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ ウェイス著 モーゼス・ ヘス : 空想的社会主義者
Sub Title	Moses Hess, Utopian socialist, by John Weiss
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.9 (1961. 9) ,p.832(100)- 836(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19610901-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

号）所収、拙稿「イギリス産業革命史研究についての覚え書」を参照されたい。

——一九六一・七・一六——

ジョン・ウェイス著
『モーゼス・ヘス——空想的社会主義者』
(John Weiss; Moses Hess, Utopian Socialist Detroit, Wayne State University Press, 1960, pp. 77.)

野地洋行

一

若きマルクスの研究が盛んになったことと関連して、モーゼス・ヘスも再び検討の対象となった。つまりマルクスやエンゲルスは、ヘスやグリュンの真正社会主義を批判することによって、自分たちの中の観念論的要素を清算し、科学的社会主義を形成していったのである。

ヘスと、マルクス、エンゲルスの関係は浅くはない。一八四二年、マルクスにライン新聞の編集局へ参加することをすすめたのはヘスである。同年、エンゲルスに、ヘーゲル左派は論理的に共産主義に向わざるをえないことを教えたのもヘスである。エンゲルスの

伝記者グスタフ・マイヤーはそれを認めている。更に、ローレンツ・フォン・シュタインと共に、フランス社会主義のドイツへの最初の紹介者たる栄をもつヘスは、——ヘスの研究家ツロシスティによると——同時にマルクスにとってもまた、フランス社会主義への案内者だったといわれる。

注1　「マルクス年譜」（M・E・L研究所編、岡崎・渡辺訳、青木書店、十八頁）もまた、これを裏打ちするように、一八四二年の十月～十二月頃、マルクスははじめてフランス社会主義文献に接した、とある。だが、本格的な研究はその頃からとしても、最近の研究ではマルクスとフランス社会主義との接触が、もっと遡られることがある。だがこの点に関しては、まだ資料的に全く未確認である。

ヘスはまた、一時マルクス、エンゲルスの協働者でもあった。フランス社会主義の紹介者たる実を示すかのように、ヘスは一八四五年に、マルクス、エンゲルスとともに「十八世紀以降のフランスとイギリスにおける社会主義と共産主義の歴史」という翻訳シリーズを計画している。しかも、本書の著者ウェイスによると、意外に知られていないが強調されねばならない事実がある。それは、ヘスが、ドイツ・イデオロギーの一部分を書いている、ということだ。しかも、彼自身、その代表者の一人であった真正社会主義を批判している部分である。(p. 45) (p. 72, note 6)

だが、他方、「共産党宣言」における「ドイツ社会主義または真正社会主義」での痛烈な批判を想起すれば十分なように、マルクスは、ヘスを徹底的に克服されねばならない対象として捉えている。

それでは、マルクス、エンゲルスとヘスを結びつけたものは何であろうか。そして、何が彼らを決定的に分離したのであろうか。それは、マルクスとヘスとの、具体的な思想交流の究明の中ではじめて答えられる問題であるが、ヘスへのわれわれの関心はこの点から出発する。

ヘスの研究としては、テオドール・ツロシスティ[1]の古典的研究やルカーチ[2]、およびコルニュ[3]の研究があったが、戦後エドマンド・シルバナー[4]の研究や、彼の編集による書簡集が出されている。

注1　Zlocisti; Moses Hess, Der Vorkämpfer des Sozialismus und Zionismus, Berlin, 1921.
2　Lukács; Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik, Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XII, 1926.
3　Cornu, Auguste; Moses Hess et la gauche hégélienne, Paris, 1934.
4　Silberner; Moses Hess, an annotated Bibliography, New York, 1951.
——; The Works of Moses Hess, Leiden, 1958.
——; Moses Hess, Briefwechsel, 1959.

本書は、最近盛んになってきたアメリカでの思想史研究の一つとして、ことに数多くはないアメリカでのドイツ社会主義研究の一つとして興味があるのでとり上げてみた。

二

要約してみよう。本書は序文の他に、次の三章からなる。

一、モーゼス・ヘスと「人類聖史」。
二、真正社会主義者。
三、ユートピアニズムと科学主義の間で。

一八四六年——一八七五年におけるモーゼス・ヘス。

ヘスは一八三六年、「人類聖史」をかき、ヘーゲル左派として出発した（第一章）。一八四一年——四六年は、彼の真正社会主義者としての時期であるといわれる。真正社会主義は、ドイツ観念論哲学をフランス社会主義に直接結びつけようとする考え方であるが、ヘスはカール・グリュンとともに、まさにこれを代表している。ヘスは、ヘーゲルをパリへ、バブーフをベルリンへ導こうとしたのである。ドイツ哲学とフランス社会主義との関係は、理想と現実、理論と実践、哲学と政治、などの関係と考えられ、これらの統一、止揚が、ヘスのいう意味での弁証法であり、ひいては、真正社会主義の内容だったのである（pp. 24—5）。

だが、ヘスにおける理想と現実、理論と実際とは、あくまでもヘーゲル的であった。ヘスは次のように考える。経済学者と神学者はそれぞれ、〝精神なき肉体の世界〟と〝肉体なき精神の世界〟を作

り上げたのだ。これはともに誤っているから統一されねばならない。ヘスはこの統一を、精神が肉体を支配する、という形で実現させうると考えた。彼が、客観的な経済法則について考えた場合でさえも、それは人間の外にあるものであり、又彼自身の無知の結果なのだから、人間の自覚が高まれば、それは人間を制約するものではありえなくなる、と考えたのである。この点、物質界を絶対精神の外化、と考えたヘーゲル思弁哲学の残滓をはっきりみることができよう（pp. 38—39）。ヘスにとって、弁証法の過程は、精神と物質との矛盾・止揚の過程としては現われず、人間の理念と、その理念の自覚の間の過程でしかなかったのである。つまり精神内部の過程だった。したがって社会主義も、経済社会の矛盾の中から必然的に生れる客観的要請ではなく、道徳上の至上命令なのである（p. 36）。（以上、第二章）

さて、一八四六年以降、マルクスとエンゲルスの影響による、ヘスの科学的社会主義への改宗と、協力の時代がくる。それは、はじめにのべた通りである。三人はともにドイツ・ブラッセル新聞を編集し、資本主義社会の経済的条件を重視して古典派経済学を研究し、ともにドイツ・イデオロギーを批判することによって、彼らの過去の思弁的要素を清算しつつあった。ヘスは、抽象的な人間理念の代弁者であることを捨て、勇敢に階級斗争と革命運動に参加した。

だが、やがて一八四八年の革命と、ラッサールとが、彼を再びユートピアンにつれもどすのである。ヘスはマルクスの理論に対する尊敬と、マルクスによって導かれた、経済的条件の重視は長く失わなかったが、マルクスの「党」とは袂を別ったのである。

一八六三年、ラッサールのすすめに応じて彼とともに労働者の政権参与のためにたたかい、ラッサールの「国家社会主義」をうけいれた。一八七五年死没。

結局、彼は初期のヘーゲル的観念論をすてきれなかった。「彼のユートピアニズムは一八六三年に復活したが、ヘスが、資本主義の経済的矛盾を指摘する時、彼はそれを社会変革のかげにある原動力としてではなく、社会改良を望ましいものとする条件としてしかみなかった。」（p. 59）つまりヘスがもっとも、経済的条件に注意した時でさえも、それは人間の精神とは切りはなされたもの、外にあるもの、単なる条件、としてしか考えられなかったのだ、と著者はいっている。彼はこうして空想と科学の間を動揺した（第三章）。

三

ヘスや、真正社会主義自体に対する批判は「ドイツ・イデオロギー」や「共産党宣言」によって知られているから、ここではくりかえさない。単に本書の著者ウェイスに対して批判を加えるにとどめよう。

まず第一に、この研究に決定的に欠けているのはヘス研究のための視点である。ただマルクスとその科学的社会主義に対する漫然たる反感があるだけである。社会主義の歴史の中でヘスの役割をどうみ、ことに科学的社会主義との関連をどう考えるか、という問題視点を失ったら、この時代に関していえば、いかなる研究も一人の思想家を歴史の中に位置づけ、その役割を固定させることはできないといえる。

著者はむしろ、マルクスによって克服されるべき思想家として、最初からヘスを規定してかかる従来の研究に反対し、ユートピア社会主義に対する今までの評価が、マルクスによって圧倒的に支配されていることに抗議する。ヘスはそこから救い出されねばならない（p. 2, p. 8）。著者のこの主張はその限りにおいて正しいものをもっている。たしかに今まで、マルクス以前の社会主義はマルクスによって克服されねばならない無知として考えられ、その積極面を不当に低く評価されることが少なくなかった。だが、このことは思想家を評価するに当って、彼に不足するものをマルクスの位置からふり返えって、非難するのではなく、彼を彼の置かれた時代と社会にもどして評価しなければならない、ということを意味するだけである。それ以下でもなければ、それ以上でもない。著者は、ヘスの評価をマルクスの支配から免れさせるために、評価それ自体を放棄してしまった。この本にはヘスを歴史的に位置づけようとする意図が全く欠けているようにみえる。この本が伝記的解説的であって、理論的でありえないのはそのためであろう。むしろ、問題視点をもたないことが、ヘスの研究書としては異色である、といえるかもしれない。

現在、初期マルクスの研究においては、哲学的な「疎外」の概念が、いかにして哲学者マルクスから経済学者マルクスへの発展に際して、媒介者の役割を果したか、という点に、集約されているように思えるが、この点に関しての、ヘスとマルクスとの対比も、また著者の問題外のことである。

たとえば山中隆次氏は、この点に関し、ヘスのマルクスに対する影響を高く評価するコルニュの見解を批判して次のようにいっている。ヘスの“Geldwesen”は、マルクスにそれほど影響を与えていない。コルニュはそれがマルクスの疎外概念に社会的・経済的基礎を与え、さらにヘスが疎外された労働の概念を把握している、といっているが、それは認めがたい。ヘスの「疎外」は、私的所有一般の疎外であって、賃労働、資本制生産における疎外ではない。もし、賃労働における疎外を把握しているようにみえるときでも、それはせいぜい、流通面での把握にすぎない。そしてその著“Geldwesen”（1845）は、マルクスの経哲手稿とのちがいを明示するだけである。そこにおいては私的所有と、資本制生産における所有とが、無媒介的にオーバー・ラップしている。このように山中氏は主張しておられる。

注　経済学史学会、第二十二回大会報告、一九六〇年。

このように問題をヘスとマルクスとの関係という点に設定し、マルクスの疎外論と、ヘスのそれとの対比という限られた観点の中で

ヘスを研究することは、ヘスの存在意義をもそのような限定された観点の中で考えることになりやすく、山中氏の場合のように否定的な答えがでたとき、ヘスの存在意義、あるいは研究意義はまた、さらに別の所にもとめられねばならないのである。かくて、ヘスとマルクスの疎外概念の対比という限られた視点の中でのみ、ヘスをみることには問題があり、初期社会主義者ヘス、という更に広い視野をもたねばならないことは明らかであるとしても、しかも本著の著者のように、そのような問題視点をまったく持っていないことは、本書にとって大きな欠陥であることは否めない。著者は、マルクスにおいて、疎外概念の発展が、彼をして科学的社会主義者たらしめる媒介者となったのだ、という認識すら欠けているのではなかろうか。

新刊紹介

講座・国際経済・第2巻『国際収支』

国際収支は国際経済学のなかではよく開拓された分野であり、国際経済についてのテキスト・ブックにはかならず取り扱われている。国際収支についての単行本としても、土屋六郎著『経済成長と国際収支』中央経済社がある。本書は有斐閣が企画した『講座・国際経済』全6巻のうちの第一回配本として出された第2巻である。これを土屋氏の前掲書と比較すると、次のような特色がみられる。

土屋氏が「経済成長」に統一的観点をおき、国際収支の理論的分析を主眼とされているのに対し、本書は国際収支についての歴史、理論、政策、現状分析を、専門別に九人の筆者が担当している。現実に生起している国際経済の諸現象を理解するため、その歴史と理論と現状とを体系的に、かつやさしく解明する、というのが講座全体としての狙いであり、本書の、序説　国際収支と国際協調、Ⅰ　金本位制の理論と歴史、Ⅱ　国際収支論、Ⅲ　国際収支の現状分析、国際収支ゼミナール、という章構成もこの趣旨に沿っている。ただし、とくに理論の部分はあまり「やさしく」ないかもしれない。

国際収支理論はいわば技術論であるから、執筆者によって意見がくいちがうということは少ない。しかし理論部分と、問題と文献を取り扱った「国際収支ゼミナール」、さらに現状分析を担当した人も、多少は理論に触れているので、これらの間に意見がくいちがわないまでも、重複していると思われる箇所があり、その場合説明の仕方もいくらかは違っている。これが「体系的」ということについての難点である。

講座全体のもう一つの狙いである、「国際経済事典の役割」を本書に果させるためには、巻末に事項索引が必要であろう。

本書が第一回配本であり、他の巻は未だ刊行されていないので、講座全体の批評はできないが、本書だけについていえば、国際収支の理論と歴史についてはすでに書かれたものも多いので、ドル危機、貿易の自由化など最新の問題についての現状分析に興味が見出される。学生諸君にとっては国際収支についての入門書としても利用できると思われる。

（有斐閣刊・A5・二四九頁・四五〇円）

—矢内原　勝—

＊　＊　＊

W・W・ロストウ著 木村健康・久保まち子・村上泰亮共訳『経済成長の諸段階』

W. W. Rostow, The Stages of Economic Growth.—A Non-Communist Manifesto, 1960.

この原著は既にその出版以来、各国の識者の間に多大の関心を惹起してきたことは周知の通りであるが、ここにその邦訳がなされ、わが国の読書界にも更に広く親しまれようとしている。「非共産党宣言」なる公衆の耳目を魅するような副題をもつこの書には、その理論の形式的及び内容的両側面から、いろ〳〵興味ある特色がある。まず従来